



TITLE:

精神分析における主体生成の過程 とその起源をめぐる諸表象に関する研究(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

岡田, 彩希子

CITATION:

岡田, 彩希子. 精神分析における主体生成の過程とその起源をめぐる諸表象に関する研究. 京都大学, 2016, 博士(人間・環境学)

ISSUE DATE:

2016-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k19787>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開; 許諾条件により要旨は2016-06-22に公開

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	岡田 彩希子
論文題目	精神分析における主体生成の過程とその起源をめぐる諸表象に関する研究		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、描画状況の観察記録によって、主体が位置変換を経ながら生成するありさまを取り出し、その生成の構造論的な特徴を「双極性」として提示し、日本文化における起源の表象やまなざしの空間構造の中にその特徴が反映していることを描き出し、もって精神分析における主体生成は、主体自身と、同一化される他者との間に起こる、同一化とその解除という出来事として位置づけられることを示したものである。</p> <p>序章では、フロイトの患者、およびフロイト自身の夢を取り上げて、本論文の論点を提示している。どちらの夢でも、亡き父親を夢に見てから目覚めており、夢を見ている間に、父親と夢見る人との間の同一化が行われているとされる。フロイトの患者は、病床で苦しむ父に早く死が訪れて欲しいと考えたが、そのことを父に知られなくなかった。夢の中では、父は自分が死んでいることを知らないことになっており、患者のこの願いは果たされている。しかし夢見る人は父に同一化しているため、彼は自分自身の死を夢見ていることになる。また、フロイト自身の夢では、亡き父を代理する人物の欲動に自分の過去の欲動を添わせることによって父との同一化を果たしながら、その欲動の自己所属性を否定しつつ夢から覚める。これらの夢からの目覚めは、自らを死んだ父と同じ領域、すなわち死者の域にいったんは属せしめ、そこからこと新しく生成を行うという道を通してなされる。</p> <p>このような夢からの目覚めの体験は、死者に同一化した自分と生者であることを自覚する自分との間での揺動と対比とを同時に含んでおり、筆者はこの目覚めの位相は、フロイトが人生早期を含んだ欲動の働きの水準で捉えた、精神機能の「双極性」という概念によって記述すべきものであると考える。この構想の下に、続く第一章において、幼児の描画場面の観察が記述される。</p> <p>第一章「子どもの描画場面における主体性の位置変換」で報告される描画場面においては、「描く」と「掻く」の間での音韻論的ブリッジが生じたことが観察されている。幼児は初め「地球の爆発」などを単色で能動的に「描いて」いたが、母親に自分の背中を「掻かせる」ことによっていったん受動的な主体となり、再び自分の描画に戻ると、割れた地球は引付き、彼は大きな街の風景とその地下の秘密の卵工場を彩色で「描いた」。音韻論的ブリッジを介して主体性を位置変換させる往還運動が起こったのである。</p> <p>この成り行きは、幼児という主体が、いったん自分自身を離れて、母親の場へと移り、そこから自分自身の身体を「掻く」ことにより、自己身体への能動的な働きかけの道を作り、今度は自らが自己身体に関係づけを行ったと解される。子どもには、自分自身の身体との関係を構成する時期があり、それは主体生成の重要な一要素である。とはいえ、自己身体との関係の形成は、思いのほか容易ではない。それは、主体の起源は何なのかということが問題になるからである。ここで現れてきた卵工場という表象は、母親と同一化した限りでの主体の起源はどのようなものかという困難な問題への答えとして主体自身が編み出したものである。これによって、自己の起源に相対して機能する自覚的な働きとして、子どもに主体生成が起こったと捉える。</p> <p>第二章「寸断された身体のエマーゴと日本神話におけるその出現」では、ラカンによる「寸断された身体のエマーゴ」という概念が取り上げられており、このエマーゴについてのラカン自身の議論の変遷を検討して、これが自己身体への主体の関係の構成の困難を表すとする。「寸断された身体のエマーゴ」はラカンによる鏡像段階論において、子どもの自己受容知覚と結びついたものであると論じられており、また、自己の鏡像を</p>			

見るという視覚体験は、自己を外側から先取りの一つの纏まりとして捉えることであるとされ、両者は双極構造を形成している。その両者はともに自己身体の像であるといえ、両者が調和的に総合されることには困難が伴い、両者の間には開口部が存在する。先取りされた自己の鏡像は、主体にとって社会的存在としての自己像となるが、寸断された身体は、起源的な解体状態のまま主体の中に留まり続ける。すなわち自己の起源の表象は、社会的な自己像との間で双極性を構成しつつ、ラカンのいう一定の統合乖離の水準に存在する。

この統合乖離の水準にまで表象作用が及ぶ経験としては、一方では精神分析中の夢や、精神病がある。しかし他方では、主体は、メラニー・クラインの言う母の胎内にこの寸断された身体の表象を映し出すことによって自己の起源との関係を保ち、自然の中に映し出すことによって外界との関係を保っている。このように起源と外界とを重ねて理解する想像力の働きは、寸断された身体のイマージに支えられており、それによる想像の表象は、日本神話において母胎から現れた神が寸断される場面や、母胎内生活に関する江戸期の人々の想像の一つである「胎内十月図」にも表現されていると考えられる。

第三章では、視覚空間における「見る」と「見られる」の間の双極性が扱われる。この双極性は、見ているのは自分であるという自覚を伴う視覚体験と、見られている存在との間の関係である。ここでラカンによる「唯物論的な」意識の定義が取り上げられる。それは「像が結ばれると意識が発生する」というものである。「像」というものの物質的存在が、それを見ている意識の主体を発生させると考えるのである。そしてこの考え方を、ラカンの後年の「像」についての考え方に照らし合わせて、夢という「像」のこちら側と向こう側に、莊子と蝶のように、互いを見ている主体が想定できるとする。ここに能動と受動の双極性が構成されている。このことは、序章における夢からの覚醒における主体生成に良く構造的に対応している。

終章では、これまでの各章において見出された双極構造の知見を総合することにより、主体生成が、その双極性の運動を培地として行われることを論じている。フロイトが欲動論の見地から、主体生成が双極性から立ち上がることを見出しているのと同様に、ワロンは発達心理学の見地から、未分化な二極性がやがて能動と受動の交替による認識に至り、主体的な自我が生じるとしている。第一章において報告された描画状況における位置変換も、このような双極構造の運動が反復されてゆく過程の一環であると思われ、また夢からの目覚めは、この反復の舞台となる。主体は、この双極構造の揺籃の中から生成してくるものであると捉えられる。

(論文審査の結果の要旨)

精神分析においては主体生成がどのように行われるのか、また主体生成に伴い、その出発点となる主体の起源はどのように表象されるのかということは、精神分析の創設以来大きな論点となってきたことであり、この論点をめぐってさまざまに力点の異なる精神分析の立場が形成されてきたと言っても過言ではない。この問題を考えるに当たって一つの軸となってきたのが、自我あるいは主体というものの捉え方をめぐる論争である。フロイト自身において自我の能動性と依存性の両方の強調があり、その後の精神分析の中では自我の主体性に重点を置くのか関係性の充実に重点を置くのかの立場の違いが生じ、起源に関しても、子ども時代をもう無くなったものとして象徴的回帰の内にのみそれを捉えようとするのか、それとも子ども時代を経験的な基礎としてその後の人格形成を論じようとするのかという差異が生じている。本論文は、これらの問題領域を背景としながら、精神分析経験の中でしばしば認められることになる双極構造に着目して、この主体生成とその起源の表象の出自を明らかにしようとするものである。

双極構造はフロイトの欲動論において説かれているものであるが、欲動だけではなく心の生活全般においてこれが基本構造をなすと言われている。ただし精神分析の術語体系の中での位置づけがはっきりするほどにはこれまではまだ論じられていない概念であり、これを中心として扱っている本論文の試みは独創的である。本論文がまず序章において着目するのは、フロイトが夢からの目覚めという特殊な状況に現れてきた双極構造を、自らの経験を含めて呈示しているということである。夢の中では死者との同一化が起こり、そこから覚醒すると主体は単一性と能動性を取り戻す。すなわち自らを意識する主体は、死と生という対立を、融即と独立という対立と合わせながら素早く自らの内で経験して、夢を脱して覚醒の中へと生成するのである。

もし主体生成の過程が、夢からの目覚めという状況を踏まえることによって反復されているのであれば、その出発点、あるいは主体の起源に当たるところはどのように思念されるであろうか。フロイトが双極構造を語ったのは欲動についてであるから、心の生活の始原的な部分をこの概念で論じたと言えるし、またワロンもその二極性という概念を、生後2年目の幼児の心の生活に当てはめていることを考えると、主体生成は、かなり早くからこの双極性を踏まえてなされていると言えるであろう。ここに着目する本論文は、第一章で、親との間での統辞論的な能動と受動の役割交替(主体の位置変換)の事例を取り上げている。

この事例観察は5歳台の子どもにおけるものであるから、この時点でのこの双極性の機能の発現はすでに何回目かの反復になり、起源そのものではないと考えられるが、その分、躍動的にその位置変換が示されている。子どもは初めは描いていたが次に掻いてもらい再び描くのである。文字通り自らの身体を挺して、双極構造を実践的に演じていると言える。この場合の描画はむろんのこと、子どもの遊びにはしばしば双極構造が出現する。フロイト自身も、有名な「fort-da」の遊びと言われる糸巻きを投げては手繰り寄せるという遊びを報告しており、そこにも象徴化を基礎づける双極構造が示されている。こうした子どもにおける印象的な認識獲得の瞬間を、本論文も捉えていて、それを論の展開の基礎にしている。子どもと親との関係はしばしば母子一体と表現されることがあるが、それだけでは見えてこない位置変換の運動が、本論文の観察で捉えられていると言える。

そうした子どもの遊びないし行動の観察としては、ラカンによる鏡像段階論があり、本論文第二章では、この概念を取り込んで、主体生成の起源には何が想定されてきたのかという問題に取り組んでいる。鏡像段階は、社会的な<私>の発生の場面とされているが、鏡に映ったその自己像の裏面には「寸断された身体 of イマージ」が隠

されており、鏡の自己像との間で拮抗的な運動を営んでいるということが忘れられがちである。本論文ではこの点を重視して、鏡像段階にも一つの双極構造が働いていると捉える。そして、双極構造が恒常的に働き続けていると仮定して、それゆえ「寸断された身体のイマーゴ」も、古くから機能しているだけでなく、さらに機能が続いていると考える。実際、このイマーゴは、必要な時に投射されることによって、主体の起源の想像を助けるのである。ラカンはこの論点の具体的な現れとして西洋の神話を示しているが、本論文ではその議論に相当するところで日本神話や日本仏教説話を引用しており、それらは妊娠や誕生を物語るものである。寸断された身体が、このようにして主体自身の起源を示す表象として現前するのである。起源と現在の関係を双極構造として、あたかも今まで見ていた夢から現在の覚醒の主体が生じるかのように、意識の主体が生成すると捉えてよいであろう。

このように見てくると、双極構造は、意識の主体の生成、それも夢から醒めるときの主体的な意識の回復のときに、その都度役目を果たしているのであらうと考えることができるようになる。本論文は、そのような考えによって、第三章で意識そのものの生成についての理論を精神分析の中から取り出してきている。これも今までにそれほど論じられていないものであるが、ラカンのいう「意識の唯物論的定義」である。この定義は「像」を参照項として造られているので、後の彼の視覚論と結びつくことは不思議ではない。そして、「像」を挟んで、表象する主体と、対象としてのまなざしとが対峙する。ここにはっきりと双極構造が現れる。主体と対象が、お互いに能動と受動の役割を交換しうるように生成してきているのである。また、今までと同様に夢からの目覚めが問題になることは、ここにあの荘子が夢で蝶になるという有名なエピソードが当てはまることから見て取れる。

終章で論じられているように、精神分析が見出してきた主体生成は、双極構造による揺籃の状態から浮かび上がるものであり、またそれは夢からの目覚めのたびに繰り返されるといえる質をもっていると思われる。さらにその際に、主体はきわめて不安定な自らの起源を踏まえながら再生成する。本論文は、意識する主体に対するこのような新しい像を取り出しており、またその際に、フロイトの用意した「双極構造」の概念が発達心理学で発展しているという見方ができることや、ラカンの「意識の唯物論的定義」や「寸断された身体のイマーゴ」が、どのように相互に関連しているかということをも明らかにしたことによって、精神分析理論の総合的な理解の進展に寄与している。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成28年1月12日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：平成28年6月15日